



七色の思いを伝えます



NAGASAKI
YOUTH
REPORT
vol.10

NAGASAKI 10th DELEGATION

7 Q&As ABOUT US

ナガサキ・ユース代表団 に関する7つの基本

Q1.

ナガサキ・ユース代表団って何？

A. 「核兵器廃絶長崎連絡協議会」(PCU-NC) (右ページ囲み参照) が主催する人材育成プログラムです。2013年に第1期の活動が始まりました。次世代を担う長崎の若者が、核兵器や平和の問題を実践的に学び、この分野で活動する国内外の人々と出会うことで、自ら考え、行動する力を身に付けることを目指しています。被爆から77年が過ぎ、被爆者無き時代の到来を見据えての被爆地からの核兵器廃絶のための発信に貢献する若者が育つことを願ってのプログラムです。

Q3.

費用は誰が負担するの？

A. 活動にかかる費用は、勉強会の開催や報告会の開催、報告書の作成等基本的に核兵器廃絶長崎連絡協議会が負担します。また、活動内容に海外での活動が含まれる場合は、渡航費および滞在費として一人当たり最大で20万円の補助金が支給されます。海外への渡航に際し20万円を超える部分は個人負担となります。

Q2.

誰が応募できるの？

A. 募集対象は、長崎県内に在住・在学・在勤の大学生・大学院生、および同程度の年齢の若者です(18~25歳を目安)。高校生(応募時)は不可。国籍は問いません。核兵器問題に関心があり、本プロジェクトの活動を通して、こうした分野での知識や経験を得たいと希望する若者、公式の活動期間(任命時から翌年8月31日まで)が終了した後も何らかの形で『核兵器のない世界』の実現のための活動にかかわっていく意欲のある若者を求めます。大学での学部や専攻等は問いませんが、日本語・英語での一定のコミュニケーション能力は必須です。また、活動に求められる知識を得るための勉強会や企画、準備のためのミーティングに原則すべて参加可能で、他のメンバーと協力してプログラムに積極的に参加する姿勢が求められます。

Q4.

誰がメンバーを選ぶの？

A. 選考は2段階で行われます。1次審査は志望動機などが書面審査されます。2次審査は日・英による面接です。長崎大学及びRECNAの教員だけでなく、他大学の教員・英語ネイティブスピーカー、長崎県、長崎市の担当者の参加も得て審査を行います。

Q5.

核問題を専門的に勉強して
いなくても大丈夫？

A. 大丈夫です。選考後の学習を通じて、核問題の基礎から最新情勢までを幅広く学ぶ機会があります。長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）の教員に加え元外交官や国連の軍縮担当者など学外の専門家を招いた講義やワークショップも開かれます。また、長崎の被爆の実相やその背景についても学習します。10期生の場合は、任期中に約30回の様々な勉強会と集中講義を受講しました。

Q6.

具体的な行動内容は？

A. 大原則は『自分たちのプログラムは自分たちで創る』です。9期生はコロナウィルスの拡大による渡航制限やニューヨークでの核不拡散条約（NPT）再検討会議の延期により、当初の活動計画を大幅に変更することになりました。結果として主にインターネットを使っただけの様々な活動を展開しました。核軍縮と平和に関する国際的なセミナーやシンポジウム、ウェブ会議への参加、オンラインでの国際プレゼンテーションの主催、そして核軍縮の分野で活動している様々な人々との交流動画の配信などです。そうした活動はまたSNSを使って発信され、多くの人々に共有されます。参加者一人一人が自分の興味や関心、目標に沿って、オリジナルな活動プランを立てていく、というのがナガサキ・ユース代表団の活動の醍醐味と言えるでしょう。

Q7.

任期後の予定は？

A. 長崎県、長崎市、長崎市民及び一般市民の方々への活動と成果の報告を行い、8月末の任期満了を迎えた後は、「ナガサキ・ユース代表団」のメンバーとして活動する義務はありません。しかし、一人一人が自分の経験を活かし、何らかの形で核兵器の問題に関わっていくことが奨励されます。実際に、ナガサキ・ユース代表団のメンバーだった学生には、全国での平和教育の出前講義や講演、取材、また国際交流イベントへの参加などの依頼が多数舞い込みます。義務ではありませんが、核兵器廃絶長崎連絡協議会からそれらの依頼への協力を要望されることは珍しくありません、また、核兵器廃絶長崎連絡協議会やRECNAが主催する核問題のセミナーやシンポジウム等、様々なイベントに参加することで、さらに知識や経験を積んでいくことも可能です。ナガサキ・ユース代表団での経験を踏まえて、大学院で核問題を専門に学ぶ道を選んだ人もいます。

『核兵器廃絶長崎連絡協議会 (PCU-NC)』って何？

「長崎が核攻撃を受けた人類最後の都市に」と願う長崎県民、市民のため、長崎県、長崎市、長崎大学の三者が一体となって、核兵器廃絶に取り組むための枠組みを構築することが検討され、2012年10月4日に核兵器廃絶長崎連絡協議会（PCU-NC）を設立いたしました。また、一般会員の長崎県、長崎市、長崎大学に加え、長崎平和推進協会及び国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館も特別会員として参画しております。



核兵器に関してだけにとどまらない様々な知識の習得

小松原 優光

(長崎大学多文化社会学部2年)

勉強会では、毎回講師の先生方より、核兵器に関することから国際情勢のこと、原発のこと、さらには各国の声明文を読み解いていくことまで、普通の大学生活では学ぶことのない内容を幅広く学びました。ユース代表団のほとんどのメンバーは、元々核兵器や国際関係についての知識が豊富だったわけではありません。1回2時間合計21回の勉強会を行うことで、核兵器や近年の国際関係などについてより深く学び、知識を得ることができました。また、勉強会ではRECNAや長崎大学の先生方だけではなく、外部の講師の方々にも教えていただき、核兵器の知識にとどまらず、多くのことを学ぶことができたと思います。

さらに、勉強会の前にその内容について予め調べ、勉強会では講師の先生からの学びに加えて、それぞれ予習していた内容について質問し、勉強会が終わった後にはみんなでその内容について話し合い、議論を深めることで学んだ知識をより理解することに繋がりました。



被爆遺構巡りが与えてくれること

後藤 歩夏

(長崎大学多文化社会学部2年)

私たちは活動の一環として、広島、長崎でフィールドワークを行いました。

広島研修では市内班、呉班、大久野島班の3班に分かれて行動しました。私は呉班の一員として研修に参加しましたが、呉では、軍港都市として栄えてきたということから、日本の被害の歴史だけではなく加害の歴史を見ることもできました。長崎でのフィールドワークでは、被爆者の方にガイドをしてもらいながら浦上天主堂や山里小学校を訪問し、あらためて長崎の遺構を実感することができました。

フィールドワークを通して、私たちは様々な被爆遺構をめぐりました。実際に遺構を訪れることで被爆当時の惨状を肌で感じ、原爆投下時の人々の普通の何気ない生活、さらにそれが原爆により一瞬で崩され、残ったのは焼け野原という悲しい事実が私の心に重くのしかかってきました。被爆遺構に行くということは、私たち現代を生きる人間に原爆投下と真摯に向き合う時間をあたえてくれます。原子爆弾の脅威を実感する機会に乏しい私たちにとって、そのような機会はとても貴重なものです。フィールドワークを通して私たちはより真剣に「平和」を考えることができ、核なき世界の実現へ向けての思いをしっかりと確かめることができました。





若い世代へ勉強会や研修の知識を

宮崎 優依

(長崎大学経済学部2年)

出前講座は、オンラインと対面の両方で実施しました。

長崎の中学校の出前講座では、平和集会などで既に学んでいる原爆投下時のお話や戦争の歴史に焦点を当てるのではなく、現在・未来に向けたテーマを主に取り扱いました。前半はナガサキ・ユース代表団10期生の紹介、最近の国際情勢について、NPTやTPNWについて、非核兵器地帯についてなどを授業の中に組み込み、後半はディスカッションも取り入れました。生徒アンケートなどを含む中学校の委員会による研究発表を出前講座の中に組み入れるなどして、自分たちが一方的に話すのではなく、生徒たちの意見も述べてもらい、意見の交換と共有を目指すアプローチを重視したプログラムを企画しました。

ニューヨークの日本人学校では、長崎県や広島県出身の学生が少ないことから、原爆投下時の紙芝居の視覚教材や、被害の大きさをまとめた資料や長崎・広島にある平和建造物や資料館などの説明を加えました。生徒との交流のみならず、職員の方や校長先生と対談する時間も準備し、海外の日本人学校における平和教育において難しい点、工夫されている点などをお聞きし、今後のナガサキ・ユース代表団の活動の参考になる助言もいただきました。



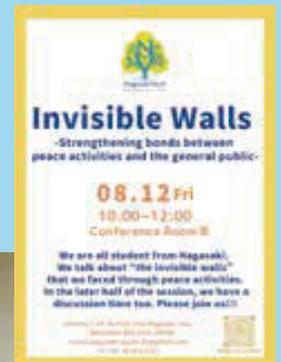
発表を通して伝えなかった事、また得られたこと

姜 妙京

(長崎大学多文化社会学部2年)

サイドイベントとしての発表は、今回のニューヨーク渡航の大きな目的の一つでした。私たちは今回「Invisible Walls -Strengthening bonds between peace activists and the general public-」と題し、平和活動を熱心に行う人々と、そのような活動から距離を置いている人々との間の壁について考察し、発表を行いました。私たちメンバーの中で核兵器問題についての議論を広げていくことの大切さが共通認識となっており、そのために必要であると考えた三つの要素について Invisible Wall、「見えない壁」と表現しました。まず一つ目の壁は核兵器をめぐる教育格差についてです。先輩の9期生の方々から頂いた平和教育格差の資料を引用し、広島・長崎とそれ以外の都市での平和教育のギャップについて説明をしました。二つ目の壁として、環境問題やジェンダー格差のように、一般的に広く論じられている社会問題の事例と、核兵器の問題を比較した際に浮かび上がる、普遍化の壁について示しました。環境やジェンダーの問題が「身近な問題」として認識されているのに対して、核兵器の問題については、まだまだ多くの人々が日常の枠外にあると意識していることが原因だと考えました。そして、三つ目の壁として、平和活動家や平和活動自体に対するイメージを取り上げました。

サイドイベントに参加して下さった各国の平和活動家、NGOの方々との交流からも様々なコメントや助言をいただき、最前線で平和への道を開拓する活動家の人々と、一般的な人々との間にある様々なギャップを少しずつ狭めていくことが核兵器廃絶への第一歩であると強く考えました。





緊迫した会議の傍聴

福永 楓

(長崎大学大学院多文化社会学研究科2年)

私たちが今回傍聴したNPT再検討会議は、「NPTの三本柱」毎に3つの主要委員会(Main Committee)および補助組織(Subsidiary Body)に分かれています。私たちは3つの主要委員会と本会議を傍聴することができました。私は主に3つの委員会の中でも「核不拡散」を話し合う第2委員会を傍聴しました。

ウクライナのザポロジエ原発周辺で続く軍事活動に関して各国が軒並み懸念を表明する中、ロシアによる自国の行動の正当化と強硬な姿勢から、落ち着いた雰囲気の中行われていた議論が徐々に白熱し始めたことが印象的でした。今回は、最終文書案の採決の段階でロシアの反対によ

り、2015年に続き、2回連続での再検討会議の決裂という結果になってしまいました。核兵器禁止条約第一回締約国会議では、核兵器廃絶を求める機運が中小国と市民社会を中心に高まりを見せた一方で、国連加盟国の9割以上が加入するNPTで対照的な結果となったことは非常に無念です。しかし、国連で実際に最終文書を各国が意見を出し合い作成していく過程を傍聴するという極めて貴重な経験をできたことは、私たちにとって得難い経験だったことは間違いありません。



各国代表部との対談

野尻 稀海

(長崎大学多文化社会学部2年)

ニューヨークでは会議の傍聴のほかに、事前にアポイントメントを取ったいくつかの国の代表団の方たちと実際にお会いし、対談することができました。今回は核兵器国のフランスやイギリスをはじめ、NPTに加盟せず核兵器を保有しているパキスタンや、NATO加盟国のトルコやカナダなど、様々な立場の国の意見・主張を生で聞くことができました。国際会議の場だからこそ得られる、非常に貴重な経験だったと思います。

長崎での勉強会である程度の知識を身につけたつもりでしたが、実際各国の核事情は私達の想像以上に複雑でした。特に、対談した国それぞれの意見が真っ向からぶつかったときは、改めて核軍縮に対する国際的な合意の難しさを実感することになりました。しかし、核問題解決のために、より現実的な道筋を探っていく必要性を理解するきっかけにもなったと思います。被爆地長崎の想いと世界の現状をどちらも知ることができたからこそ、見えてくるものがありました。





世界で活躍する日本の方との対談

猪原 彩美

(長崎大学多文化社会学部2年)

渡航期間中は、UNDP本部への訪問や、軍縮会議日本政府代表部の小笠原一郎大使、中満泉国連事務次長(軍縮担当上級代表)との面談も行いました。国連事務次長や軍縮大使としての、会議での立ち回りや、会議の進捗状況についてお話してくださり、質問にも答えていただきました。

UNDPの本部では、危機局プログラム・スペシャリストの道券康充様と、対外関係・アドボカシー局ジャパンユニット上級顧問の伊藤綾子様が、アフガニスタン危機を例に、様々なお話をしてくださりました。



その中で、「人道援助や開発援助など、それぞれのマンデートがあるが、リンクしていない・連携がうまくいかないという現状があり、更なる連携の強化が必要だ」というお話がありました。私は、これは戦争や核兵器の問題においても言えることだと思います。平和のために自分は何が出来るのか、ひとり一人が考えて行動に移し、連携することが大切だということも再確認することができました。

世界の最前線で活躍されている日本人の方々からの話は、どれも刺激的で、とても有意義な時間となりました。



広瀬 訓 (RECNA副センター長)

ナガサキ・ユース代表団第10期生は、延期されていたNPT再検討会議が2022年8月にニューヨークで開催されたことに伴い、3年ぶりの海外派遣となりました。ナガサキ・ユース代表団のメンバーとして海外渡航した経験のある先輩が身近にほとんどいない状況で、コロナの感染状況の推移によって派遣スケジュールも流動的になり、対応に苦労する部分もありました。しかし、ニューヨークでは、とにかく「ぶつかってみる」というメンバーたちのアプローチの甲斐あって、「準備不足では？」という懸念を払しょくする活動ぶりで、極めて充実した内容となりました。特に今回の派遣では、コロナ感染のためもあってか、他のNGO等の参加が例年に比べて少ないという印象があり、各国代表との面談が充実したものとなったことは特筆できると思います。「普通の」大学生が核兵器の問題や平和の問題について他国の代表団と意見交換ができる機会などはめったにありません。そんなチャンスを十分に活かした派遣となりました。

OG&OB VOICE

片山 桂維 5期生

(小学校教諭)



愛媛県から長崎大学へ入学した私は、修学旅行で長崎を訪れたこと以外、平和教育を受けたことはほとんどありませんでした。「長崎に来たのだから、長崎らしいことをしたい。」そんな思いがナガサキ・ユース代表団への一歩を踏み出させてくれました。ユースの活動では、核廃絶に関する最先端の情報を知ることができ、どうすれば同世代、後世に伝えられるか考え、仲間とぶつかり合う時間があります。これらは、大学生にとってかけがえのない時間となります。

「難しそうだから…」と一歩を踏み出せないでいるあなた。難しいことをやるのは間違いありません。しかし、それだけの価値はあります。私は、ユースの活動を通して、人とのつながりに、人との出会いに感謝する場面が多々ありました。

「やるなら本気で。」本気になった分だけ、一生涯の仲間と経験が手に入りますよ。皆さんの勇気ある一歩を応援しています。

何 雲艶 7期生

(長崎大学 非常勤講師)



コロナによって国際交流・人員往来が妨げられ人と人とのつながりが弱まっているのではないかと感じています。

ロシアによるウクライナ侵攻の長期化、台湾海峡をめぐる緊張の激化、そして英新首相トラス氏は「地球滅亡を引き起こす可能性があっても核兵器による報復を命じる覚悟がある」と明示しました。このように世界は未曾有の緊張感に包まれており、まさに大混乱寸前という感じがします。また、NPT再検討会議は今回も最終文書の採択に合意することができずに終わりました。市民社会の平和活動は政治権力と核兵器の前に、無力だと挫折を感じる人は少なくはないのではないでしょう。しかし、こういう時だからこそ、市民社会の協力と平和の呼びかけは重要になります。

終戦から77年目、戦争経験者は年々減り、私たちのほとんどが戦争の恐ろしさを知らない世代となっています。原爆を含む殺戮の実態を学習し、戦争の記憶を継承することは緊急かつ不可欠の課題です。

ユース代表団は先生たちから「what」を習い、みんなで「why」を議論し、世界各国の有志と一緒に「how」を探り、平和を発信していく活動です。国際的な視野をもつ人材の揺りかごととも言えます。平和志向があるなら、参加してみませんか。

鈴木 直緒 9期生

(IT企業勤務)



私はナガサキ・ユース代表団の活動を通して、個人的に「目標達成<チームワーク>」ということを学びました。特に私達の代は、コロナの感染拡大のために活動がイレギュラーであったため、自ら掲げた目標に対し、手探りで活動していました。例えば、私たちは「同世代の若者に平和教育を知ってもらいたい」「全国の18-24歳以下の若者の0.1%(30,000人)に対し、アンケートを実施」という具体的な目標を立てました。結果は、アンケートの回収は約3,000人強でした。しかし、より重要なのは短い任期の間、達成を急ぎ単独行動するのではなく、チームで相談・作戦を立てて動くことができたことです。当初は、各自講義がある中で100人程度しか実施できませんでした。しかし、各エリアごとに分担したり、発信方法を工夫して回収を伸ばしました。その他、メンバーでのプレゼンテーションの機会や報告会で、チームでの活動を重ねました。社会人になった今、その経験が活かれています。ぜひ応募して下さい。

有吉 有樹人 9期生

(長崎大学医学部医学科4年)



文教キャンパスの掲示板にあったポスターがふと目につき立ち止まりました。偶然見つけたポスターから始めたナガサキユース代表団の任期は風の如く過ぎ、今リーフレットを書かせていただいております。

9期生の任期中は1500人以上の平和教育に関するデータを集め統計解析を行い、一つの参考データとして、日本には地域によって平和教育の内容や頻度に偏りがあるということを数値で示すことに成功しました。

ユース代表団では多種多様な背景をもつ仲間が同じ目的に向かって進もうと頑張ります。時にぶつかり合うこともあります。それ以上お互いを思いやり支え合う事が大切なのだと9期生のみんなに教えてもらいました。

平和な世界を作るためにできる事、それは1人では微々たるものでも9人集まれば少しはカタチのあるものになります。せっかく長崎にいるのです！平和について考えてみませんか？

■ 編集発行責任

核兵器廃絶長崎連絡協議会 (PCU-NC)

※PCU-NCは、長崎県、長崎市、長崎大学の3者による核兵器廃絶のための協議体。

■ お問い合わせ先

核兵器廃絶長崎連絡協議会 (PCU-NC)

〒852-8521 長崎市文教町1-14

(長崎大学核兵器廃絶研究センター (RECNA内))

TEL:095-819-2252 / FAX 095-819-2165

<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/pcu/>

**核兵器廃絶
長崎連絡協議会**

PCU-Nagasaki Council

「ナガサキ・ユース代表団」公式Facebookページ
<https://www.facebook.com/nagasakiyouth>

facebook

ナガサキ・ユース代表団